



リサナメント * TAKARAZUKA 通信

NO.3 2003/2/20

2003年を迎えてひと月。立春の朝、その光の明るさにはっとしました。風はまだ頬につめたく、インフルエンザも落ちつく様子を見せていません。明るいことばかりではないニュースも、地球のあちこちから聞こえてきます。それでも、春の空気のきらきらする戸外に心誘われているこの頃です。

♣ 風を聴いたひととき リサナメント第8回

昨年(2002年)の12月23日、『小さなクリスマス・コンサート』が、山林さま宅で開催されました。お迎えしたのは時田直也氏。前回にも増して磨き上げられた歌と語りに、共感をおぼえ、その世界にひきこまれてしまいました。「島唄」と「さとうきび畑」、歌声からもピアノからも、風が流れ出してきたようでした。「千と千尋の神隠し」の主題曲、豊かな声量で歌詞の深い意味を余すところなく歌い上げてくださいました。金子みすゞさんの詩に曲をつけられての「私と小鳥と鈴と」、みんなちがって、みんないい——許しあい、たすけあい、愛しあうことなのだと感じました。十数曲の熱唱のあと、「きよしこの夜」を全員で合唱、アンコールにも応えてくださって、聴衆一同、幸せなあたたかさを胸に家路につきました。時田氏に心からのお礼を申し上げたいと思います。

♣ 歳をとると、時間が飛ぶように過ぎてゆくのは、なぜ？

それは、新しい刺激をもらえない脳が、とても退屈しているから、という、櫻井よしこさんの文章を読みました。東北大学の川島隆太教授の説明をひいて、櫻井さんは続けます。たとえば見知らぬ土地に出かけた時に、行きと帰りでは同じ道なのに行きの方が長く感じられたという経験。これは、同じ道を通っていても、初めての時には刺激が満ちていて、脳がそのひとつひとつを吸収し、解析しているからだということです。つまり、脳を退屈させないためには、脳に刺激を与えることが大切、そして脳が活発に働くと、免疫力、抵抗力も強くなるというわけです。脳を活発に働かせるには、脳への栄養補給として脳細胞にたくさんの血液がながれることが必要です。それには、第一に三食をきっちりとり、第二に脳が喜ぶ刺激を与えることだとか。。。リサナメントの集まりの効用をひとつ見つけた気がして、ちょっとうれしくなりました。



「たくあんの波利と音して梅ひらく」

加藤 鞆郎

古代、「花」といえば梅のことでしたが、いつの間にかあてやかな桜にその座を奪われてしまいました。私はいつも、「お染」にたいする「野崎村のお光」を連想します。春寒の庭にひっそりと咲く梅の花。たくあんのひややかな蓄み心地。振り向けばそこにある幸せ、そんなイメージとしての梅の捉え方に、人生探求派と呼ばれる人の面目躍如の一句です。



次回のリサナメントの集まりは、暖かくなった4月頃を予定しています。

みなさま、お体大切にお過ごしください。

世話人 * 山林・石原 通信 * 鳥越